

一般助成(子どもの健全育成支援)

「市立長野高校でのPBL実践 ～ジブンとミライを創る学び～」事業

多様な関係性の中で生徒たちが自らの興味や関心に 基づいて主体的に学ぶ探究型の学習を支援する試み

2022年度から実施されている高校の新学習指導要領では、「探究型学習」が重点項目に挙げられている。そこでは主体的、内発的な学びが求められるが、その実践に向けて、一人ひとりの好奇心や創造力を起点に、校舎を飛び出し、出会いと経験の中で学ぶカリキュラム開発や学校を地域へ開く仕組みづくりに取り組んでいる。



大学生を中心に年間を通して放課後や授業外の探究サポートを行っている



1年生を対象にした「大人のプロジェクトを聞く会」

「PBL」という新しい学び方を 全国の公立高校に届ける事業を展開

東京都目黒区に拠点を置くNPO法人「青春基地」は、「生まれ育った環境を超えて、一人ひとりが想定外の未来をつくる」ことをビジョンに掲げ、誰もが自分の未来の可能性をあきらめることがない社会を目指している。そうした社会を広げていくために、「教育の再定義」をミッションとし、全国の公立高校に「PBL(問題解決型学習 Project Based Learning)」という新しい学びを届ける事業に取り組んでいる。

同法人が掲げるビジョンには、子どもたち自身が自分の力で「どう生きたいか」、「どうありたいか」を主体的に探究する過程を支えていきたいという思いが込められているが、現実の教育現場においては、たとえば「自分はダメな

人間だと思ふことがある」と答える高校生が72.5%にのぼり、子どもたちの自己肯定感の低さや、新しい挑戦が生まれにくい公教育の財源・ノウハウ不足、教員の多忙化、学校の閉鎖的な組織文化・構造などが深刻な課題となっている。

やりがいや自分が生きている価値を感じにくい思春期の子どもたちに必要なのは、対話的な関係性と「やってみよう」という子どもたちの好奇心や内発的動機の尊重だと考えている。それを実践するべく、2019年4月から公立高校においてPBLのカリキュラムを導入し、生徒たちが地域に飛び出し、自らの興味・関心と地域の伝統や行事などを結びつけられるような環境をデザインするとともに、開かれた学校の実現を目指すプロジェクトに取り組んできた。

市立長野高校との連携が3年目を迎え、 生徒や学校がより地域とつながる

同プロジェクトは長野県の市立長野高校との連携という形で実施され、昨年度が3年目となった。昨年度は、1年生を対象に「大人のプロジェクトを聞く会」を3月に開催し、生徒は長野の社会人や学生計11名のプロジェクトを聞いたり、一緒に考えたりすることを通して、自身のプロジェクトのテーマを考えた。2年生に対しては、テーマ決めからはじめ、生徒自身の「やってみよう」といった内発的動機や、学校を超えて人や場所に出会うことを目的に、4月から1月まで継続的に探究の授業をサポートした。10月の中間発表や1月の発表会にはゲストや協力者も列席した。

また、生徒がより自由に学んだり、地域とつながったり、

様々な挑戦を広げられたりすることを目的につくられたiLABという部屋で、大学生を中心に年間を通して放課後や授業外の探究サポートを行っているが、昨年度は生徒たち自身が企画し、生徒5名、長野県立図書館館長以下3名の図書館職員、大学生2名、学校職員4名が参加し、iLABの在り方を考えるワークショップが行われた。

同プロジェクトを通じ、同法人では生徒のアクションが多様になったと感じている。生徒からは「自分の視野の狭さや考え方に気づくことができ、色々な視点から物事を見る大切さを知った」という声が寄せられているほか、教員からは「多くの生徒にとって有意義な活動になったのではないか」という声や、校長先生からは「自分の言葉で語る生徒が増えてきた」という言葉をいただいたという。



2年生を対象にした「探究プログラム」ワークショップ



助成団体:特定非営利活動法人 青春基地

<https://seishun.co/>



高校生の探究学習を地域の大学生や社会人で支える活動を実践

教育分野、特に成果が数字として出にくい探究学習や学校改革は、その重要性が高い一方、学校も財源が縮小し、教育関係のNPO法人なども予算が立てづらなのが現状です。その分野で助成していただき、活動ができたことに、とても感謝しています。おかげさまで社会人や大学生など、より多様なゲストをお呼びすることもできました。

特定非営利活動法人 青春基地
非常勤スタッフ 宮脇 祐貴さん